

為文學者經

三文字屋金平

青空文庫

たな 棚から落ちる牡丹餅を待つ者よ、唐様に巧みなる三代目よ、
 ふぼく 浮木をさがす盲目の亀よ、人参呑んで首縊らんとする白
 けもの 痴漢よ、鰯の頭を信心するお伶俐連よ、雲に登るを願ふ
 みづずともがら みづうつつきうば 蚯蚓の輩よ、水に影る月を奪はんとする山猿よ、無芸無
 うしよく 能食もたれ総身に智恵の廻りかぬる男よ、木に縁て魚を求め
 くさうつへびをどろうつたへもの 草を打て蛇に驚く狼狽者よ、白粉に咽せて成仏せん事を
 ねが 願ふ艶治郎よ、鏡と睨め競をして頤をなでる唐琴屋よ、惣て
 かづみにらくら 世間一切の善男子、若し遊んで暮すが御執心ならば、直ちにお宗
 旨を変へて文学者となれ。

わ いはゆる ぶんがくしゃ 我が所謂文学者とはフィヒテが『Ueber《ユーバル》das

《ダス》 Wesen 《ウエーゼン》 des 《デス》 Gelehrten 《ゲレール

テン》に述べたてし、七むづかしきものにあらず。内新好

が『一目土堤』に穿りし通仕込の御作者様方一連を

云ふなれば、其職分の更に重くして且つ尊きは豈に夫の扇

子で前額を鍛へる野幫間の比ならんや。

夫れ文学者を目して預言者なりといふは生野暮一点張

の釈義にして到底咄の出来るやつにあらず。我が通仕込の

御作者様方を尊崇し其利益のいやちこなるを欽仰し、

其職分をもて重く且つ大なりとなすは能く俗物を教え能く

俗物に渴仰せらるゝが故なり、(渠等が通の原則を守り

て俗物を斥罵するにも関らず) 然しながら縦令俗物に

かつがう

渴仰せらるゝといへども路傍みちばたの道祖神だうろくじんの如く渴仰せら

るゝにあらず、又賞めで喜よろこばるゝと雖いへども親おやの因果いんぐわが子こに報むくふ

かたむすめみせもの

片輪娘かたむすめの見世物の如く賞めで喜よろこばるゝの謂いひにあらねば、決して

しんばい

く心配しんぱいすべきにあらず。否いな、俗物ぞくぶつの信しん心しんは文学ぶんがく

者や即ち御作者おんさくしや様方さまの生命せいめいなれば、否いな、俗物ぞくぶつの鑑賞かんしや

を辱かたじけなふするは御作者おんさくしや様方さま即ち文学ぶんがく者しやが一期いちごの栄誉えいよ

を辱ふするは御作者様方即ち文学者

ひなん

なれば、之を非難ひなんするは畢竟ひつきやう当世たうせいの文学ぶんがくを知らざる者

といふべし。

此故このゆゑに当世たうせいの文学ぶんがく者しやは口くちに俗物ぞくぶつを斥罵せきはする事すこ頗はな甚

だしけれど、人じん氣きのまへに枉屈わうくつして其奴隸どれいとなるは少すこしも珍めづ

らしからず。大入おほいりだ評判ひやうばんだ四版はんだ五版ばんだ傑作けつさくぢや大作たいさく

ぢや豊年ぢや万作ぢやと口上こうじやうに咽喉のどを枯らし木戸銭きどせんを
はんまけはんまけ半減はんげんにして見せる縁日えんにちの見世物みせもの同様どうやう、薩摩蠟燭さつまらふそくてら
くひかと光る色摺表紙いろずりべうしに誤魔化ごまくわして手拭紙てふきがみにもならぬ厄介やくかい
ものうりつ者を売附けるが斯道しだうの極意ごくい、当世たうせい文学者ぶんがくしやの心意こころい
きき氣ぞかし。さりながら人氣じんきの奴隸どれいとなるも畢ひつきやう竟きやうは俗物ぞくぶ
つさいどつさいど濟度しゆしやうといふ殊勝しゆしやうらしき奥おくの手があれば強あながち無用むようと呼ば
ゝるにあらず、却て之れ中々なか／＼の大事決だいじけつして等閑なほざりにしがたし。
ぞくじんぞくじんをしをし俗人くまのゐはうたんを教ふる功德くどくの甚深じんしん広大くわうだいにしてしかも其勢せいりよく力ちから
の強盛きやうせい宏偉くわいなるは熊肝宝丹くまのゐはうたんの販路はんろ広きをもて知らる。
どうせうどうせう洞簫とうせうの声は嚙りうりやう吮うはでうしあだとして蘇子そしはらわたちぎの腸つひを断りたれど終にトテンチ
ンツトンの上調子うはでうしあだ仇つぽきに如しかず。カントかんたにひねつた「ダン

ス」の Miss 《ミス》 B. 《ビー》 A. 《エー》 Bae. 《ベー》 瓦ぐわ
 すいとおり きらは 印刷局いんさつぎよく の貴婦人レディに到るまで 随喜ずるき
 斯糸織に綺羅を張る 印 刷 局 の貴婦人レディに到るまで 随喜ずるき
 かつがう てきは かいびやくいらい おほでき バイブル
 渴仰せしむる手際 開闢以来の大出来なり。聞けば聖書
 かけて だうとくか ゆびわ ふんぼつ
 を糧にする 道德家が二十五銭の指環を奮発しての「エンゲ
 ジメント」、綾羅錦繡りようらきんしゅうの姫様ひいさまが玄関番げんくわんばんの筆助君ふですけくん
 にやいのくを極め込んだ果の「エロップメント」、皆みな之れ
 せうせつ くどく せうせつ せうせつ
 小説の功德なりといふ。よしや一斗との「モルヒ子」に死しなぬ
 ためし つきよ かまぬ くふう めぐ う
 例ありとも月夜に釜を抜かれぬ工風くふうを廻らし得べしとも、
 たうせいせうせつ くどく さづ すこ りやく かうむ かつ あ
 当世小説の功德を授かり少しも其利益を蒙らぬ事曾て有
 るべしや。

冒険譚ぼうけんだん の行はれし十八世紀せいぎには航海かうかいの好奇心かうきしんを焰もやし、

きやうでん 京伝の洒落本流行せし時は勘当帳の紙数増加

せしとかや。抑も辻行灯廃れて電気灯の光明赫

灼くとして闇夜なき明治の小説が社会に於ける影響

は如何。『戯作』と云へる檻樓を脱ぎ『文学』といふ冠着

けしただけにても其効果の著るしく大なるは知らる。

英吉利は野暮堅き真面目一方の国なれば、人間の元来

醜悪なるにお氣が附かれずして、ゾオラが偶々醜悪のまゝ

を写せば青筋出して不道德文書なりと罵り叫く事さりと

野暮の行き過ぎ余りに業々しき振舞なり。さりながら論語

に唾を吐きて梅暦を六韜三略とする当世の若檀那

氣質は其れとは反対にて愈々頼もしからず。東京の或

オルソドキシカーけうくわい ぞく ぢよがつかう
 る固執派教会に属する女学校の教師が曾我
 たり さしゑ なんによづ み わいせつぶんしよ
 物語の挿画に男女の図あるを見て猥褻文書なりと飛ん
 かんちが ろちう なげこ
 だ感違ひして炉中に投込みしといふ一ツ咄も近頃笑止
 かぎ どゝかんが バイブル
 の限りなれど、如何考へても聖書よりは小説の方が面白い
 ちが けうし めぬす
 には違ひなく、教師の眼を竊んでは「よくッてよ」派小説に
 うつゝぬ このごろ ぢよせいとかたぎ
 現を抜かすは此頃の女生徒氣質なり。例へば地を打つ槌は
 はづ せいねんなんによ せうせつよ
 外るゝとも青年男女にして小説読まぬ者なしといふ鑑定
 おそ はづ
 は恐らく外れツこななるべし。
 ぞくかい お せうせつ せいりよくか ごとだい したがつせうせつ
 俗界に於ける小説の勢力斯くの如く大なれば随て小説
 ずなはいま いはゆる ぶんがくしや
 家即ち今の所謂文学者のチャ、ホヤせらるゝは人氣役者
 やもの かづ
 も物の数ならず。此故に腥き血の臭失せて白粉の香鼻を突

く太平たいへいの御代みよにては小説家即ちせうせつか文学者ぶんがくしやの数次第々々かずしだいに
 増加ぞうかし、鯛たひは花はなは見ぬ里みさともあれど、鯡にしよ寄よる北海ほつかいの浜はま辺べ、
 薯蕷じゅんじやう 蕷ほ掘きうしゆうる九州きうしゆうの山奥やまおくに到いたるまで石版画せきばんゑと赤本あかほんは
 見みざるの地ちなしと鼻はなうごめかして文学ぶんがくの功徳くどく無量むりやうくわうだい広大
 なるを説とく当世たうせい男殆をんど門かど並なみなり。寄よれば触さはれば高慢かうまん
 の舌爛したぐらしてヤレ沙シエークス翁スピーヤは造化ざうくわの一人子ひとりごであると胴羅魔声どらまごゑ
 を振染ふりしぼり西さいくわく鶴きうかうは九皇きうかうに鳶とんびトロ、を舞まふと飛とンだ通つうを抜ぬか
 し、何なにかにつけては美学びがくの受売うけうりをして田舎者いなかもの緋ひメレンス
 は鮮あざやかだから美びで江戸ツ子の盲めくら縞しまはジミだから美びでないとい
 ふ滅法めつぽふの大議論だいぎろんに近所きんじよ合壁がつべきを騒さわがす事少めづしも珍めづらしから
 ず。好奇ものずきな統計家とうけいかが概算がいさんに依たれば小遣帳こづかいちやうに元禄げんろくを

ひね 通人^{つうじん}迄^{まで}算入^{さんにう}して凡^{およ}そ一町^{いちちやう}内に百「ダース」を下^{くだ}

る事あるまじといふ。

だいどころ

夫れ台所

に於ける

鼠の

勢

力の

法

外なる

飯

焚

男

めしたきをとこ

が升落しの計

略も更に

討滅し

がたきを

思へば、

社会

もんだい

みかたむ

いっちやうない

ぶんがくしや

なほざり

う

問題

に耳傾くる

人いかで

此一

町

内

百

「ダース」

の

ぶんがくしや

なほざり

う

か

文学者

を等閑にする

を得べき。

若し

惣ての

文学者

を驅

て

兵役に

従事せしめば

常備軍

は頓に

二倍して

強兵

へいえき

じゆうじ

じやうびぐん

には

かさ

さん

ばい

きやう

へい

じやう

へい

きやう

へい

きやう

の

実忽ち

挙がる

べく、

惣ての

文学者

に支

払ふ

原稿料

を

すべ

ぶんがくしや

なほざり

う

算れば

一万噸の

甲鉄艦

何艘

かを造る

に当る

べく、

惣ての

文学者

を

すべ

ぶんがくしや

なほざり

う

ぶんがくしや

せうひ

ひつ

ぼくれう

ちやうしう

ちやうしう

ちやうしう

ちやうしう

ちやうしう

ちやうしう

ちやうしう

ちやうしう

ちやうしう

ちやうしう

文学者

が消費する

筆墨料

を徴

収す

れば

慈善病

院

三ツ

四ツ

を設る

事決して

難きに

あらず、

惣ての

文学者

が

くひつぶ こめにく ちくせき
 喰潰す米と肉を蓄積すれば百 ひやくたび 度 ききんきた 饑饉来るとも更に恐る
 ゝに足らざるべく、若し又惣ての文学者を一時に殺戮す
 れば其死屍は以て日本海を埋むべく其血は以て太平洋を
 変色せしむべし。

文学者は一の社会問題なり、貧民が、僧侶が、
 娼妓が社会問題となれる如く。

熟々考ふるに天に鳶ありて油揚げをさらひ地に土鼠ありて
 蚯蚓を喰ふ目出度き中に人間は一日あくせくと働きて喰ひか
 ぬるが今日此頃の世智辛き生涯なり。学校の卒業証
 書が二枚や三枚有つたとて鼻を拭く足にもならねば高が壁の
 腰張か屏風の下張が関の山にて、偶々荷厄介にして

箆^{たんす}筥^すに蔵^{しま}へば縦^た令^とへば虫^{むし}に喰^くはるゝとも喰^くふ種^{たね}には少^{すこ}しもなら
 ず。学^{がくし}士^{なん}ですの何^{なん}のと云^いつた処^{ところ}で味噌^{みそ}摺^{すり}の法^{はふ}を知らずお辞^じ義^ぎの
 札^{れい}式^{しき}に熟^{じゆく}せざれば何^{どこ}処^いへ行^いても敬^{けい}して遠^{とほ}ざけらるゝが結^{おち}局^ちにて
 未^まだしも敬^{けい}さるゝだけを得^{とく}にして責^せめてもの大^{おほ}出^で来^きといふべし。
 ミル^{ひもの}ト^{へうほん}ンは中^{なか}々^{くもつ}以^いての外^{ほか}なり。ト^ろの結^つ局^{まり}が博^{はく}物^{ぶつ}館^{くわん}に
 乾^{がくしや}物^やの標^{へう}本^{ほん}を殘^{のこ}すか左^さなくば路^ろ頭^{とう}の犬^{いぬ}の腹^{はら}を肥^{こや}すが世^よに
 学^{がくしや}者^やとしての功^{こう}名^{みやう}手^{こう}柄^{みやう}なりと愚^ぐ痴^ちを覆^{こほ}す似^え而非^せナツシユ
 詰^{づま}りなれど、さるにても笑^{せう}止^しなるは世^よの是^{これ}沙^さ汰^た、飯^{めし}粒^{つぶ}に釣^つら
 るゝ鮒^{ふな}男^{をとこ}がヤ^{さい}レ才^{さい}子^しぢや怜^り惻^{こう}者^{もの}ぢやと褒^ほめそやされ、偶^{たま}
 さか活^いきた精^{せい}神^{しん}を有^もつ者^{もの}あれば却^{かへ}て木^か偶^{へつ}のあしらひせらるゝ事^{こと}
 沙^さ汰^たの限^{かぎ}りなり。騙^{かた}詐^りが世^よ渡^{わた}り上^{じやう}手^ずで正^{しやう}直^{ぢき}が無^{いく}氣^ぢ力^{ぢなし}漢^し、

無法が活澆で謹直が愚図、泥亀は天に舞ひ鳶は淵に

躍る、さりとは不思議づくめの世の中ぞかし。

斯る中にも社会に大勢力を有する文学者どのは

平氣の平三で行詰りし世を屁とも思はず。春うらく蝶と

共に遊ぶや花の芳野山に玉の卮を飛ばし、秋は月てらくと漂

へる潮を觀て絵島の松に猿なきを怨み、嚴冬には炬燵を奢

の高櫓と閉籠り、盛夏には蚊帳を栄耀の陣小屋として、

米は俵より涌き錢は墓口より出る結構な世の中に何が不足

で行倒れの茶番狂言する事かとノンキに太平樂云ふ

て、自作の小説が何十遍摺とかの色表紙を付けて売

出され、二号活字の広告で披露さるゝ外は何の慾も

なき氣樂きらく三昧まい、あツたら老先おひさきの長い青年せいねん男女なんによを墮落だらくせ
 しむる事は露思つゆもはずして筆費ふでづひえ紙費かみづひえ、高たかが大家たいかと云はれ
 て見たさに無暗むやみに原稿紙げんかうしを書きちらしては屑屋くづやに忠義ちうぎを
 尽すを手柄てがらとは心得こころえるお目出めでたき商売しやうばいなり。月雪花つぎはなは魯
 か犬いぬが子こを産んだとては一句いっくを作り猫ねが肴さかなを窃ぬすんだとては一
 杯ぱいを飲のみ何なにかにつけて途方とほうもなく嬉うれしがる事おかめが甘酒あまざけ
 に酔ゑふと全おなじ。
 斯かくの如ごとく文学者ぶんがくしやは身分みぶん不相応ふさうおうに勢せい力りよくを有いうし且かつつ
 身分みぶん不相応ふさうおうにのんきなり。世よに氣樂きらくなるものは文学者ぶんがくしや
 なり、世よに羨うらやましき者ものは文学者ぶんがくしやなり、接待せつたいの酒さけを飲のまぬ者
 も文学者ぶんがくしやたらん事を欲ほつし、落おちたるを拾ひろはぬ者も文学者ぶんがくしや

たるを願ふべし。ねが

然るに世にすねたる阿呆は痛く文学者を斥罵すれども是

れ中々に識見の狭陋を現示せし世迷言たるに過ぎず。す

冷静なる社会的の眼を以て見れば、等しく之れ土居し

て土食する一ツ穴の蚯蚓蟪蛄の徒なれば何れを高しとし何れ

を低しとなさん。濁醪を引掛ける者が大福を頬張る者を

笑ひ売色に現を抜かす者が女房にデレる鼻垂を嘲る、

之れ皆他の鼻の穴の広きを知て我が尻の穴の窄きを悟らざる烏滸

の白者といふべし。窮理決して迂なるにあらず実践何ぞ浅

しと云はんや。魚肴は生臭きが故に廉からず蔬菜は土臭

しといへども尊とし。馬に角なく鹿に※《たてがみ》なく犬は※

と啼ないてじやれず猫ねこはワンと吠ほえて夜よを守まもらず、然しかれども自おのづから馬
 なり鹿しかなり犬いぬなり猫ねこなるを妨さまたけず。稼かせぐものあれば遊あそぶ者あり覺さ
 める者あれば酔ゑふ者あるが即よち世よの实じつ相さうなれば己おのれ一人ひとりが
 かつてではうだい勝か手たな出放題でうだいをこねつけて好い子の顔かほをするは云やうはふ様やうなき
 わからずやごんごどうだん歿分曉漢言語同断といふべし。縦たとひ令い石橋いしばしを叩たいて理窟りくつ
 を拈ひねる頑固党ぐわんことうが言ことの如ごとく、文学者ぶんがくしやを以もつて放埒遊惰怠はうらついうだたい
 慢痴呆社まんちほうしゃくわい会かいの穀潰こくつぶし太平たいへいの寄生虫きせいちゅうとなすも、兎とに
 かくぶんがくしやてんかさいかうさいふく角文学者かくぶんがくしやが天下てんかの最幸さいかうさいふく最福さいふくなる者ものたるに少しも差さ
 問もんなし。然しかるを愚図々々ぐづ／＼と賢さかしらだちて罵ののし隣家となりのお菜かずを
 かんがひとりものくりごとなんえら考かんがへる独身者ひとりものの繰言くりごとと何ぞ扱えらまん。
 しかのみならず、文学者ぶんがくしやを以もつて怠慢遊惰たいまんいうだの張本ちやうほんとなす
 加之加之、

おせつ、かいは偶々怠慢遊惰の却て神の天啓に協ふを知らざる白痴なり。謹んで慮かるに神の御恵洽かりし太古創造の時代には人間無為にして家業といふ七むづかしきものもなければ稼ぐといふ世話もなく面白おかしく喰て寝て日向ぼこりしてゐられたものゝ如し。アダム飛ツ塵が働いて喰ふといふ面倒を生じゝは扱も迷惑千万の事ならずや。神が創造の御心は人間を樂ましめんとするにありて苦ましめんとするにあらず。無為は天則なり、無精は神慮に協へり。正直の頭に神宿る——嫌な思をして稼ぐよりは真ツ正直に遊んで暮すが人間の自然にして祈らずとも神や守らん。ぶんがくしや文学者を以て大のンきなり大氣樂なり大阿呆なりといふ

事の当否たうひとは兎も角も眼ばかりパチクリさして心は藻脱もぬけの売からと
 なる木乃伊ミイラ文学者ぶんがくしやは豈あに是れ人間にんげんの精粹きつすゐにあらずや。
 且つ又聖經バイブルの教ふる処に依れば天国てんこくに行かんとすれば是非ぜひと
 も小児せうにの心を有たざるべからず。小児せうにの如くタワイなく、
 意気地なく、灣白わんぱくで、ダ、をこねて、遊び好あそびずきで、無法むはふで、
 歿分曉わからずやで、或時あるときはお山やまの大將たいしやうとなりて空威張からゐばりをし、
 或時あるときはデレリ、茫然ぼうぜんとしてお芋いもの煮えたも御存ごぞんじなきお目出めで
 たき者は当世たうせうの文学者ぶんがくしやを置いて誰たぞや。
 文学者ぶんがくしやなる哉、文学者ぶんがくしやなる哉。天変地異てんぺんちいを笑わらつて済すますものは
 文学者ぶんがくしやなり。社会しやくわい人事じんじを茶ちやにして仕舞しまふ者は文学ぶんがくし
 者やなり。否いな、神の特別とくべつなる聾盲ひいきを受けて自然しぜんに hypnoti

る《ヒプノタイズ》さるゝものは文学ぶんがくしや者なり。文学ぶんがくしや者なる哉、文学者なる哉。

我れ三文字屋金平夙に救世ぐせいの大だい本願ほんぐわんを起おこし、終つひに

一切いっさいの善男ぜんなん善女ぜんによをして悉く文学くふう者こらたらしめんと欲ほつし、

百で買かツた馬むまの如さかやくのたりくとして工風くふうを凝こらし、虱しらみを捫ひねる事

一万足に及びし時酒屋さかやの厮童こぞうが「キンライ」節ふしを聞きいて豁くわ

然つぜん大悟たいごし、茲えんだいに椽大しひのみの椎実筆ふるつまを揮まねて拾しゆじやうく衆生ための為

に為ゐ文学ぶんがくしや者せう経きやうを説解せつかいせんとす。

右みぎから見みても左ひだりから見みても文学ぶんがくしや者は最幸さいしゆん最福さいふくなる動物どうぶつなり。我われが

拔苦ばつ与樂よろの説法せつぽうを疑うたがふ事なく一いち図ずに有ありがたがツて盲信まうしん

すれば此世このよからの極樂ごくらく往生おうじやう決けつして難かたきにあらず。銀価ぎんか

の下^げ落^{らく}を心^{しん}配^{ぱい}する苦^く勞^{らう}性^{しやう}、月^げ給^{つき}の減^{げん}額^{がく}に氣^きを揉^もむ
 神^{しん}經^{けい}先^{せん}生^{せい}、若^{もし}くは身^{から}軀^だにもてあます食^しもたれの豚^{ぶた}の子^こ、
 無^む暗^{やみ}に首^{くび}を掉^ふりたがる張^{はり}子^この虎^{とら}、来^{きた}つて此^こ説^{せつ}法^{ぽう}を聴^{ちやう}聞^{もん}
 し而^{しか}してのち文^{ぶん}学^{がく}者^{しや}となれ。朝^{あさ}飯^{めし}前^{まへ}の仕^し事^{ごと}にして天^{てん}
 下^かを驚^{おどろ}かす事^コ虎^レ列^ラ刺^はよりも甚^{はな}だしく天^{てん}下^かに評^{ひやう}判^{ばん}さるゝ事^さ
 蜘蛛^{くも}男^{をとこ}よりも隆^{さか}んなるは唯^{ただ}其^{その}れ文^{ぶん}学^{がく}者^{しや}あるのみ、文^{ぶん}学^{がく}者^{しや}あるのみ。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆60 愚」作品社

1987（昭和62）年10月25日第1刷発行

1990（平成2）年6月30日第5刷

底本の親本：「文学者となる法」右文社

1894（明治27）年4月

入力：奥村正明

校正：菅野朋子

2000年8月1日公開

2005年12月9日修正

青空文庫作成ファイル..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

為文学者経

三文字屋金平

2022年 5月 3日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>